
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 12

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 221.言葉の空き箱に経験を注いで
- 222.遠いオランダからの厚意に応えて
- 223.言葉の履歴書
- 224.フローニンゲン大学での修練:二年目のプログラムに関する概略
- 225.発達の不可逆性に抗って
- 226.普遍性の獲得プロセスとしての人間発達
- 227.国際心理学会議(International Congress of Psychology)での発表へ向けて
- 228.訪問者
- 229.言葉の沃野に飛び込んで
- 230.カート・フィッシャー5つの変容原則:「統合化」と「複合化」
- 231.熟成
- 232.実相
- 233.焦点化・代用化・差異化という三つの変容原則
- 234.安全基地と帰還場所
- 235.私の中の辻邦生先生:有限から無限へ
- 236.知識と言語の照明作用
- 237.孤独さと個の確立について
- 238.深化に寄り添って
- 239.発達段階5/6「構成的認識段階」について
- 240.ダイナミックシステム理論と多様な応用領域

221. 言葉の空き箱に経験を注いで

時に軽やかな、時に重厚な旋律が聞こえてくる。全身に飛び込んで来る壮麗な旋律に呼応して自分の内側の感覚が動き出す。

私はいつも音楽に囲まれている。私はいつも音楽に支えてもらっている。そんなことをふと思った。

というのも、日々の書齋での仕事には、必ずクラシック音楽が伴奏者として付いてくれているからだ。音楽に背中を支えられ、音楽と共に走り続けている自分がある。

伴奏者の顔は実に多彩である。クラシック音楽と一括りに言えども、その分類は多岐にわたる。そのため、私は日々の自分の内側の流れに応じて、作曲家や演奏形式を選択するように心がけている。

最近では、昨年母に勧めてもらったジョージ・ウィンストン (George Winston) というアメリカのピアニストやマリア・ジョアン・ピレスシュ (Maria João Pires) というポルトガルのピアニストの曲を聴くことが多い。

仮にクラシック音楽という伴奏者がいなければ、日々の仕事は極めて単調になってしまうだろう。楽曲が生み出す壮大な流れの中に身を置くことによって、一定のリズムを保ちながら日々の仕事に取り組めるのだと思っている。

音楽を全身で浴び、音楽の流れと自分の内側の流れが会おう時、そこには新しい流れが生まれる。その流れを感じながら、私はこれまでの自分の言葉には何かが流れていないと思っていた。

言葉に血が通っていなかった、と言ってしまえばそれまでであるが、それでは少し舌足らずな感がある。これまでの私の言葉を眺めてみると、どうもそれらは「空き箱」のように見えるのだ。言葉の空き箱。

言葉の空き箱に何かが不在であるため、私は自分の言葉に対して、どこか虚偽的・防衛的なものを感じ取っていた。不在だった何かが最近ようやく浮かび上がってきたのである。それは、「経験」と「存在」である。

私たちの経験というのは、まさにその人が全てを総動員して獲得していくものであり、そこには必ずその人の血が流れている。ましてや、私たちの存在は私たちそのものであり、そこには血が通う以上の何かが込められているのではないだろうか。

そうした性質上、経験や存在が込められていない言葉は、実に空虚で味気ないものとして感じられるようになってきたのだ。言葉の質感と密度に対してたいそう敏感になりすぎている感もなくはないが、経験と存在が不明瞭な言葉の反乱に対して、不正義に見て見ぬ振りをすることはもはやできない自分がいるのも確かである。

今すぐに実行するのは難しいかもしれない。しかし、自分の言葉に経験と存在を注ぎ込む努力を怠りたくはない、そんな思いがやって来たのである。言葉に経験を、言葉に存在を注ぎ込みながら今を生きたいと強く思ったのだ。

222. 遠いオランダからの厚意に答えて

以前、「発達理論実践編ゼミナール」のFBグループディスカッションの中で、文科省で小中高の英語教育に携わっておられた方から興味深い話を聞いた。第二言語を習得する際には、「生活言語」と「学習言語」という異なる二種類の言語能力を獲得する必要がある、という話だった。

生活言語とは文字通り、日常生活を営む際の会話の中で用いられる言語である。店でのやり取りや他者との挨拶・雑談などが例として挙げられる。一方、学習言語とは、活字を通して思考することや議論することに用いられる言語である。

とりわけ海外で暮らす帰国子女にとって、学習言語をどの国の言葉でどれだけ深く習得しているかは、彼らの後々の知性の発達に多大な影響を与えると思っている。日本語を母語として育った子供が海外で生活をせざるをえなくなる時、どれだけ強固な学習言語を日本語で獲得しているかが、第二言語で学習言語を習得していくことの鍵を握ると思う。

母国語というのは、思考運動において自分の利き腕のように機能するものだと考えている。ただし、物理的な腕と少し違うのは、利き腕の能力が伸びることによって利き腕でない方の腕、つまり他の言語を使うときの思考力も伸びていく、というような相関関係があるように思うのだ。

人間の思考能力を一つの動的なシステムと捉えると、利き腕に喩えられる母国語能力は「コントロール・パラメータ」だと言える。コントロール・パラメータとは、ダイナミックシステム理論において、動的なシステムを変化させる鍵となる特定の要素のことを指す。

要するに、このコントロール・パラメータ—ここでは母国語能力—の成長がなければ、システム全体—ここでは思考能力—の成長が起こりえないということである。私は米国時代、マサチューセッツのLecticaでの仕事と並行して帰国子女の教育に携わっており、その経験上、思考能力の成長を左右する母国語能力の重要性を痛感していた。

私は25歳の時にアメリカへ渡ったが、成人期以降に第二言語を習得することに苦戦を強いられ、様々な試行錯誤をしてきた。私は米国の大学院へ留学をしていたため、高度な学習言語を英語で習得し、それを駆使して思考運動することを迫られていたのだ。

同時に私が抱えていた課題は、生活言語をどこまで身につける必要があるのかに関する線引きだった。私が取った手段は学習言語の鍛錬を優先させることだった。それは結果的に功を奏し、書き言葉の習熟に応じて、少しずつ米国の文化を理解し始めることができたように思う。

当時痛感していたのは、真の意味でその国の文化を理解しようと思ったら生活言語を習得するだけでは不十分であるということだった。文化は生活言語と学習言語が織りなす有機体のような存在だと思う。

どちらかが欠けてしまったら、その文化は死滅してしまうだろう。また、生活言語よりも習得が難しい学習言語の力が弱い場合、その国の文化の真髄を体感しながら生きることは難しいと思う。

そう考えると、私はオランダという国の文化を真の意味で理解できない可能性がある、と今から危惧している。というのも、今から学ぼうとしている私のオランダ語は生活言語の域を出ないからだ。

いっそのこと、英語を普遍語の地位から引きずり下ろしたい暗澹たる気持ちになったが、その思いを糧にオランダ語における学習言語の習得についても何か策を講じていきたいと思う。

書きながらやはりこの思いは嘘に満ち溢れていると感じた。オランダがまだ遠い。自分の中にオランダはいない。しかし、オランダは自分を快く受け入れてくれようとしている。

晴れてオランダから奨学生として認定していただき、返済不要の奨学金が支給されるという通知を得た。これはとても光栄なことだと思った。

オランダからの厚意に応え、自分の中にオランダを見つけるためには、制裁のような、鉄槌を振り落とされるような衝撃が自分には必要だと思った。

223. 言葉の履歴書

—「名付ける」とは、存在を明澄の場(人間的空間)にもたらすことであった— 辻邦生

今朝、毎朝焙煎している有機豆のコーヒーが全て無くなった。人は自らの余命に限りがあることを知った時、そこからの一瞬一瞬は全て新鮮なものとして目に映り、ありふれたものだとこれまで思っていたものたちが等しく全て大切な存在に思えてくる、ということを知ったことがある。

これはよく聞く話かもしれないが、十分な生命時間がある時からそれを感じながら生きるのはなかなか困難なことだろう。今の私の日常感覚は、余命に限りがあることを悟った人間の知覚感覚と実存感覚に限り無く近いように思う。

日本で目にする一つ一つのものが新鮮であり、スーパーで購入する一つ一つのものが貴重なものであり、消費する一つ一つのものがとても尊い。そのように感じるのだ。今日購入するコーヒー豆は、日本で購入する最後のコーヒーとなるだろう。この人生における最後のコーヒー豆たちだ。

コーヒーを飲みながら、森有正先生と辻邦生先生から授かった教えを思い出す。それは、自分が従事する活動に対して何も執筆することができないのなら、その取り組みは自分の生命時間を費やすに一切値しないということだった。言い換えると、日々の仕事を通じて、言葉として何も残すことができないのであれば、それは己の存在を課して取り組むべき対象ではないと思わされたのだ。

森有正先生にせよ、辻邦生先生にせよ、ケン・ウィルバーにせよ、カート・フィッシャーにせよ、井筒俊彦先生にせよ、自らの全存在をかけて探究に打ち込んだ人間は、膨大な量の言葉を書き残している。彼らは、自らの言葉を残すことによって、己の存在の履歴書を作成していたのだと思う。

そうなのだ、言葉というのは経験の履歴なのだ。経験の履歴とはすなわち、存在の履歴に他ならないと思うのだ。

これまでの私は、自分という存在の履歴を残そうとしない、経験の履歴を残そうとしないひどく無責任な人間だったのだ。そうした無責任さの中で営まれる探究活動には何か意義はあるのか、と絶えず自問するようになっていた。

そうした名ばかりの探究活動に表面的に従事することは、私に生命を授けてくださった存在と自分の生命そのものに対する冒流行為だとすら思うようになった。一人のしがない探究者として、変貌を遂げなければならぬ日が来たのだと感じた。

今朝も自分の身体の内側に意識を向けていた。意識を身体の奥へ奥へ、深くへ深くへと向けていく。そうすると、そこには言葉にならぬ確かな無数の感覚があるのだ。言葉の形を取らず、生々しくもあり、純粋な感覚がそこにあるのだ。

こうした感覚と同様に、私たちの経験も言葉にならぬものが多くあり、言葉の形から逃れた生々しい純粋な経験があるのだと思う。そうした純粋な経験や感覚にあえて言葉を当てる必要はあるのか？ 純粋な経験や感覚は言葉から逃れたいのではないか？ という疑問が出てくることだろう。

以前の私は、純粋な経験や感覚に言葉を当てることをせず、それらをそのままにしておくのが望ましいのではないかと考えていた。しかし、今の私はまるっきり異なる考え方を持つ。

純粋な経験に言葉を当てないことは、「存在からの逃げ」ではないかと思うようになったのだ。私たちの経験を生み出すものは、私たちの存在である。そうした経験に向き合わないということは、すなわち自己の存在と向き合わないということだろう。

言葉というのは履歴を残すのだ。言葉は自らの経験を存在の中に刻印すると同時に、私たちを対象と向き合わざるをえない状況に追い込んでくる。そのような性質を持っている言葉を用いて、己の経験と向き合い、己の存在と向き合っていくこと、そのような姿勢を私は持ちたいと思うのだ。

何より、真正の言葉というのは存在と直接的に結びつくものなのである。だからこそ、言葉を尽くして自分の存在を掴んでいきたいと思ったのだ。

また、言葉を紡ぎ出すことは、自分の経験を開示し、それを他者と共有することにもつながる。日々の経験を振り返り、経験をなんとかして具現化させようとする試みのその先に、自分の内側の深くに眠っている何かが目覚めてくると思うのだ。

そしておそらく、言葉を通じて開花されるそれは、全人類に普遍的な何かではなかろうかと思うのである。だからこそ、言葉を通してそれを発見し、言葉を通して他者と共有する必要があると思ったのだ。

今日という一日を振り返り、あるいは今という瞬間を振り返り、言葉を書き残していくことは、経験の履歴を残していくことに他ならない。今日の経験を振り返り、それを言葉という形で残すことによって、経験と言葉の双方が自分の存在に流れ込み、これまで気づかなかった自己の側面をこの世界に顕現させてくれることにつながるのではないかと思っている。

224. フローニンゲン大学での修練:二年目のプログラムに関する概略

早朝の日課として、目覚めた直後に身体をその日の探究・実践活動に最適なものにするために、20分間ほど簡単な身体運動(合気道を習っていた頃に教わった準備運動と自分が長らく実践をしているヨガを合わせたような運動)を行っている。

その身体運動に並行して、精神分析学あるいは深層心理学の用語で「ドリームリコール」と呼ばれる夢の振り返り実践を長らく継続している。覚醒時に湧き上がる雑多な思念を記録し、そこから探究を進めるだけでなく、夢の中で現れる思念的ではないシンボルやイメージも探究材料の一つにしたいという思いを、いつからか持つようになった。

覚醒時に絶え間無く流れる思念的情報と睡眠時に湧き上がる非思念的情報の双方を、できるだけ逃さず掴んで行こうと真剣に思ったのはごく最近のことかもしれない。

昨夜の夢は、フローニンゲンの小高い丘に登るというものであった(フローニンゲンという町は実際には平地であり、丘など存在しないと認識している)。

晴れ渡る空の下、丘の頂点を目指す道すがら、突如として不気味な雲が立ち込めてきたのだ。それは真っ黒な雲であり、それが丘の中腹から頂上にかけて覆いかぶさっている。前方に行く人がその雲の中に入っていくと、その人は外から全く見えなくなってしまった。

私はその真っ黒な雲に向かって走っていき、そこへ突き進んでいくことが当然かのごとく、その中に躊躇なく入っていった。そこで気づいたのは、その雲の中に入った人を外から見ることにはできないのと同時に、中にいる人は外の様子が一切見えないということだった。

そのような性質を持つ雲の中にいる私は、いたって冷静であった。より正確には、不安なく冷静な感情というよりも、内からも外からも何も見えない真っ黒な雲の中を駆け抜けるこの出来事は、自分の人生の中で予め定められていた経験すべき事柄だ、という達観に似た気持ちがあったのだ。

いつの間にか私は丘の頂上まで登り、真っ黒な雲が依然として覆いかぶさっている丘を駆け下りていった。丘の中腹まで降りてくると、先ほどの不気味な雲が嘘のように消え去っていた。雲が消え去った後に出現した空は、雲が現れる前の空と何が違うのか正直あまり分からなかった。その空を一瞥した後、淡々と走り続けるべく、自分の足を再び走るモードに変えようとした。そこで目が覚めたのだ。

昨夜の夢に出てきたフローニンゲンでの生活の二年目は、フローニンゲン大学の教育科学修士(理系)のカテゴリーにある「実証的教育学(Evidence-based Education)」のプログラムに進もうと考えている。これまでは発達心理学の枠組みを通じて、人間の成長・発達に関する研究や支援を行ってきたが、その枠組みだけでは先に進めないところまで探究が及んできたと実感している。

このあたりで一度、教育心理学や学習理論などを踏まえた教育学を体系的に学んでおく必要があると強く感じている。また、イマニュエル・カントの晩年の著書“On Education (1803)”に多大な影響を受けたことも重要な要因である。

当時において、教授法 (pedagogy) は体系立った学問領域として確立されていないという問題点をカントは指摘し、「教育の科学」を打ち立てる必要性を提唱した点に私は強く共感している。また、本書の中で最もカントに共感するのは、「教育を通じて、人間は一生涯継続的に成長・発達しよう」という主張である。

何よりもカントは、各人固有の内在的な才能を発掘し、それを発達させていくことを教育の主要な目的とし、人間は教育を通じてその才能を善の方向に発達させていかなければならない、と明確に述べている。この主張はまさに、自分の譲れぬ教育思想の通奏低音として流れているものである。

それでは、どうして実証的な教育研究や実践が必要になるのだろうか？ 私が思うに、善意にせよ悪意にせよ、無知に根ざされた実践が広く教育の世界で行なわれているように見えるからだ。つまり、子供の教育にせよ、成人の教育にせよ、実証的な研究成果から見れば害悪でしかない実践が広く行なわれているのではないかと考えているのだ。

例えば、薬学の世界においては、薬Aは病気を治癒する効果があるが、薬Bは病気を悪化させる効果がある、ということが実証研究から明らかにされ、その実証結果が薬品の開発と普及に寄与するだろう。しかし、教育の世界においてはどうか？

企業の人財育成にせよ、教育実践にせよ、支援者は、自分がどのような効果をもたらす薬を投与しているのかもわからない状況にいるのではないだろうか。そこでは往々にして、知性や能力の成長・発達を阻害してしまうような実践——成分や効果などの不明確な薬の投与——が行われがちである。

それゆえに、実証的な研究を行うこととその研究成果に基づいた実践を行うことは、人間の成長・発達を支援するために大きな貢献を果たすと思うのだ。そのような思いから、フローニンゲンでの二年目は、実証的教育学に関するプログラムに進みたいと思う。

「実証的教育学」のプログラムの目的は、教育の効果をどのように実証的に研究し、教育実践の質を高めるためにどのように実証結果を活用したらいいのかを探究していくことにある。企業組織や学校教育における成長・発達支援に関して、それを実証的に研究することのみならず、それ以上に、研究成果をどのように実践に反映させていくかに課題が山積みになっている、という印象を持っている。

そのため、このプログラムを通じて、科学的に信頼性のある実証的研究をどのように進めていくかのみならず、得られた研究成果を人財育成や教育実践にどのようにつなげていくのか、という実務的な側面にも強く焦点を当てていきたいと思う。

このプログラムを進めていく中で得られた知見を、企業組織向けの人財開発プログラムや自身のオンラインラーニングに盛り込んでいきたいと思う。特に、実証的な研究成果に基づくプログラム設計や評価システムの開発、教育心理学や学習理論を組み込んだトレーニング設計を積極的に行なっていきたいと考えている。

このプログラムも「タレントディベロップメントと創造性」のプログラムと同様に60単位の履修を卒業要件としているが、こちらは30単位ではなく、20単位が修士論文で占められ、残りの40単位は下記の8つのクラスを履修することに割り当てようと考えている。

1. 定量的教育評価手法
2. 実証的教育学の理論と実践手法
3. 学習理論と教授法
4. 教育科学に関する体系的文献調査手法
5. 発展的教育評価手法
6. 実証的教育学に根ざしたインターンシップ
7. デジタルラーニングとプログラム設計
8. グループ学習の理論と実践

上記8つのクラスに関する詳細は、また別の記事で紹介したいと思う。

225. 発達の不可逆性に抗って

私たちの言葉には濃淡や密度があることを最近強く感じている。このウェブサイトを通じて紹介してきた過去の記事を眺め直してみると、それらの文章の多くは自分を通していないことに気づく。

より正確には、発達科学全般に関する様々な内容を自分を通さないようにする形で紹介しようとしてきたのである。あくまでも「紹介者」として自分を位置付け、その位置から離れないように文章を書いてきたのだ。

その結果として、それらの文章が実に味気のない「のっぺらぼう性」を醸し出していることに気づいたのである。書き手の存在が注ぎ込まれていない文章は、私にとってひどくつまらないものであるし、逆に書き手の存在が体現化されている文章は、読んでいて何か感じるものが必ずあると思うのだ。

自分が惹かれて読む書籍や論文には、書き手の存在がいつも見事に投影されている。客観性(という名の主観性)を喧伝する学術論文や専門書ですら、私の心を打つものは全て、書き手の肉声が聞こえるし、書き手の存在を直に感じるができるのだ。

今後も発達科学全般に関する知見を紹介していきたいと思うが、単なる紹介者から脱皮する必要があると思っている。結局のところ、のっぺらぼうな文章をいくら書いたところで何も伝わらないのではないか、という思いが日増しに強くなっているのだ。

事実、私はのっぺらぼうな文章から何かを学んだことはほとんどないだろうし、自分の心が動かされたことは一度もないと思う。文章の書き手も読み手も心は常に動いているのだ。こうした脈打つ心の動きを殺しながら人工的な文章を綴ることは、もはや今の自分にはできそうもない。

「すべての人間は絶えず変化し続ける」という命題が真であるならば、私という人間も絶えず変化し続けているのだと思う。であるならば、その変化のプロセスを文章として逐一記録しておきたいとも思った。

小さな変化でいい。それは退行でもいい。躍動でも停滞でもよく、とにかく変化の最中に起こる諸々の現象を書き残しておきたいと強く思うのだ。

小説家の福永武彦氏(1918-1979)の日記を読むと、自分の身に起こっていることをただ時の流れに任せて手放したくない、という強い思いを持っていたことに気づかされる。外側の世界に呼応して生起する内側の様々な現象は、書き留めておくに値するものだという強い信念を福永氏は持っていたのだ。

「発達不可逆性」についてここで思う。一時的な退行現象は起こるにせよ、ひとたび次の段階特性を獲得してしまうと、私たちは戻りたくても以前の段階に戻れないのだ。時間を巻き戻すことができないのと同じように、発達も巻き戻すことができないのだ。それが発達不可逆性である。

つまり、私たちはひとたび次の段階へ発達すると、以前見ていたように世界を見ることも、以前感じていたように世界を感じることもできなくなってしまうのだ。これはある意味相当恐ろしいことだと思うのは私だけであろうか。

発達というのは、世界からの新しい意味の汲み取り方と世界への新しい意味の構築の仕方を半ば強制的に私たちに注ぎ込んでくる。そうであるならば、この瞬間にしかできない自分の今の世界の見方や感じ方を、そして世界へ意味を与える方法を記録しておきたいと思ったのだ。

遂行する必要もないのかもしれないが、私は発達不可逆性に小さな反抗を絶えず企て続けたいのだ。

226. 普遍性の獲得プロセスとしての人間発達

チェコの作曲家アントニン・ドヴォルザークの『新世界より』がiTunesから流れ出す。これは、私が5年前に渡米する直前に知人から頂いたCDである。

この曲の第二楽章は、日本において『遠き山に日は落ちて』として広く知られている。私が長く時間を過ごした山口県の故郷では、夕方の時を伝えるためにこの曲が流れ、幼い時の私はこの曲を聴きながら日本語の歌詞を口ずさんでいたのを思い出す。

ドヴォルザークのこの曲は、時代も場所も問わずに聴き続けられてきたものだろうし、これからも受け継がれていくものなのだろうと感じた。この曲にはやはり普遍的な何かが存在しているのだ、そんなことを思ったのだ。

数々の発達論者が高度な段階を命名する時に用いる“principle”“axiomatic”“universal”という言葉は、これまでいまいち掴みどころのないものとして自分の眼前に立ちはだかっていた。しかし、目の前に覆われた雲が少しずつ消えていくのを実感しつつある自分がいる。

元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーは、自身の理論モデルの最上位に“principle(原理・原則)”段階を置いている。また、マイケル・コモンズは、高度な発達段階は“axiomatic(公理的)”な特徴を持つと指摘している。

さらに、ロバート・キーガンの弟子であり、自我の発達研究で有名なジェーン・ロヴィンジャー(1918-2008)の理論モデルを洗練させたスザンヌ・クックグロイターは、彼女の発達モデルの最上位に位置する発達段階6の特徴を“universal(普遍的)”という言葉で表現している。

それらの発達モデルで提唱される高度な段階の全てに共通する特性は、「普遍性」と言えるだろう。つまり、いかなる知性領域・能力領域においても、健全な成長・発達とはつまるところ、普遍性の獲得プロセスであるということだ。さらに言いかえると、どんな能力にせよ、高度に発達していくというのは、その能力が普遍性を帯びていくことに等しいのだ、ということに気づいた。

ここ最近、私はフランス文学者かつ哲学者でもある森有正先生(1911-1976)に大きく感化されている。彼が経験について語る時、思想について語る時、個人の経験や思想と密接に関係する発達理論を学んでいる私に対していつも大きな驚きをもたらしてくれる。

森先生は、人間には一人一人が個人になるということ、つまり真の意味でその人になることを後押しする「内側の促し」が存在すると指摘している。そして、内的な促しに応じて、独自の経験が私たちに提示されるのだ。そうした独自の経験に名前を与えるために言葉が生まれ出て、その言葉がひとつの体系を形成するときに初めて、個人の思想というものが生成されると言う。

さらに重要なことに、体系化された思想になって初めて、私たち固有の内側の促しによって生まれ出た経験が結晶化され、万人がそれに参与することができるようになる、ということを森先生は述べている。

要するに、このコスモスで一回限りの命という輝きを放つ私たちそれぞれの存在が持つ独自の経験は、思想として結実化された時に、広く万人に参照され、彼らの経験を新たに縁取ることになるのだ。私はここに、普遍性を読み取る。

人間が成長・発達していくことは、自らの内側に普遍性を構築していくプロセスであり、自らが普遍的な存在になることなのではないか、そんなことを思わされた。奇しくも、フィッシャー、コモンズ、クックグロイター、森先生を筆頭に、人間の成熟を真摯に探究し続けた人たちが発見したことは、「普遍性」という言葉に凝縮されている気がしてならない。

どんな分野でも、その道で研鑽に励み、独自の思想を紡ぎ出している人に対して私は心を打たれるのだ。人を惹きつけてやまないもの、それは普遍性がこの世に具現化されたものなのだろう、ということを感じる。

227. 国際心理学会議 (International Congress of Psychology) での発表へ向けて

渡欧前の日本での最後の仕事は、7/24から7/29にかけて横浜で開催される国際心理学会議 (International Congress of Psychology) で研究発表をすることである。昨年から、日本を代表するある人材会社さんと共に、日本のマネジャーの意識段階に関する共同研究をさせていただいている。

一人の共同者の方から今回の国際会議で一緒に発表をしないかと持ちかけていただいたのである。無事に発表の審査も通り、7/29に産業組織心理学の部門で研究発表させていただく運びになった。

調べてみると、この国際心理学会議は、心理学関係では最も大きな国際会議であり、特に今回は、世界70ヶ国ほどの国々の心理学者が集う会議とのことである。私自身、こうした規模の国際会議に発表者として参加するのは初めてであり、とても楽しみにしている。

というよりも、こうした規模の国際会議に聴衆として参加したこともないと思われるので、いきなり発表者として登壇するのも不思議な感じがする。これもきっと何かの巡り合わせだろう。

今回の会議には、企業内の研究者2名、大学教授2名、そして私を含めた5人1組のチームで参加する。私以外の4名はみなさん経験豊富な方々なので、非常に安心して当日の発表を迎えることができそうである。

しかし昨日、発表用の最終資料を完成させようと計画していたところ、その作業に取り掛かるまでに多大な時間を要してしまった。具体的には、朝6時から10時まで発表に関係のない読書をし、その後90分ほどランニングをし、途中で昼寝を挟んで13時から16時までまた関係のない読書をしてからようやく作業に取り掛かったのだ。

こうした自分の姿を観察してみると、発表資料を作成することに対する無意識の領域における抵抗が見て取れる。こうした無意識の抵抗は自分の中で頻繁に見られるのであるが、結局その根源は何なのかという解明に向けて足を進めることはこれまでそれほどなかった。

今回の件に関して、無意識の根源解明を一步だけ前に進めると、作業に取り掛かる際の迂回現象の原因が意外と簡単に見つかった。今回の発表は、ロバート・キーガンの発達モデルを活用した日本のマネジャーの意識段階調査である。迂回現象の根本原因として、キーガンの発達モデルは随分前に自分の最大の関心ごとではなくなっており、それを活用した研究を行う心的エネルギーがそれほど高くないということが挙げられそうである。

やはり研究を遂行するには、原動力として内側から湧き上がる感情やエネルギーが必要なのだろう。そうした感情やエネルギーを生み出すのは、まさに自分の主観的な関心の強さなのだと思う。

研究論文を見ている、その研究者が強い主観的(時に実存的)関心を持って研究に取り組んでいる場合、文章の中にそうした属人的エネルギーのようなものが滲み出ているものである。十中八九、そうした研究論文は読者に訴えかける何かがあるし、自分の関心領域に少しでも触れている場合、読んでいて非常に面白いものである。

仮にキーガンの発達モデルが現在の自分にとって最大の関心事項ではなくても、人間の発達というテーマが現在の自分の大きな関心事項であることに変わりはないので、今回の発表は人間発達という自分の最大関心事項に包摂されるものとして認識し、自分の中でエネルギーを再び湧き立てたい。

こうした振り返りをこの辺りで終了し、資料の完成に向けて作業を開始した方が良さそうだ。発表資料の作成に関係のない読書はほどほどにして。

【追記】: 当日の国際会議は、さながら学術的なお祭りのような印象を私に与えた。この国際会議は4年に1回のペースで開催されるため、心理学関係の人間にとって、まさにオリンピックやサッカーワールドカップと同じように貴重なイベントなのだと実感した。

発表の直前に共同発表者の方から教えていただいたのだが、第一回目の会議は、1889年のパリ万博と同時に開催され、その時にはなんと、実験心理学の父と称されるヴィルヘルム・ヴント(1832-1920)、アメリカプラグマティズムの始祖ウィリアム・ジェイムズ(1842-1910)、IQの創始者アルフレッド・ビネー(1857-1911)、精神分析学を創始したシグムント・フロイト(1856-1939)などの心理学を開拓した重鎮が参加していたようである。

現金なもので、その事実を知って、発表に向かう気持ちがだいぶ変わったものである。おかげさまで無事に国際心理学会議での発表も終わり、今回の発表経験は、研究者としてのキャリアを真剣に歩もうとする私にとって、財産の一つになったと思っている。

228. 訪問者

あれよあれよという間に渡欧の日までいよいよ一ヶ月を切った。昨日ようやく航空券を確保し、成田からフランクフルトを経由してアムステルダムへ飛び、そこからフローニンゲンへ向かうことになった。

住居に関してもようやく目処がつき、安堵感を覚えている。しかし、航空券の確保にせよ、住居の決定にせよ、やはり無意識のどこかでそれらを避けようとする自分がいたのは間違いなさそうなのだ。

重い腰を上げて決定した住居は、フローニンゲンの街の中心部にある高さ100メートルのマルティニ塔を眺めることのできる場所にある。マルティニ塔は13世紀にその原型が建設され、1482年の改築以降、今の姿を保持している。

中世から現在まで変わらずに佇んでいるこの建物を毎日眺めながら大学院に通うことになりそう。そのため、不変的なマルティニ塔は、それが不変的なものであるがゆえに、フローニンゲンでの私の変容を確かめる一里塚になるだろうと思っている。

マルティニ塔の近くを通った時に気付いたのだが、どうも私は鐘の音に掴まれる傾向にあるようだ。マルティニ塔が時折発するカリヨンの音に私は捕まってしまうのだ。この複数の鐘の音は、自分の内側の何かを安らかにする働きがあるらしい。

今回の住居もまた非常に落ち着いた空間であり、自分の仕事により一層打ち込めそうな予感がしている。マルティニ塔、美術館、緑豊かな公園、街の市場、そして中央駅が近いことは偶然であった。

今年の年初にフローニンゲンを訪れた時、オランダで最も壮麗な駅舎を目指して建設されたフローニンゲン中央駅の存在感は、当時の自分にとってとても希薄であったと記憶している。中央駅の存在が私にとって希薄であったというよりも、私が無意識的にこの駅舎を遠ざけていたような気もするのだ。

というのも、私はいつもルネサンス期の建造物や絵画が醸し出すあの圧倒的な何かに飲み込まれそうになり、この駅舎はまさにルネサンス様式の建物なのだ。ルネサンス期の建物は、人間と音楽的世界が調和した不思議な空間を醸し出しているように思える。

人間と音楽的世界が調和した空間が自分に与える影響についても見えそうで見えてこない。その一方で、あと少し、あと一歩で見えてきそうな内的感覚がある。ほとんどそれを掴みかけていると言っても過言ではないかもしれない。

それは米国在住時代から折を見て自分にやって来る感覚であり、自己の物語性と虚飾性と不滅性の全てを包括的に覚知してしまうという感覚なのだ。これは間違い無く特殊な意識状態の下に引き起こされる内的感覚であり、その感覚の永続時間は数分に満たない。

時間としては非常に短い感覚なのだが、最初にこの感覚に覆われた時は大いに当惑した。自分はこの世界にいなかったのだという気づきと、自分はこの世界に最初からずっといたのだという気づきが同時に襲来する感覚と表現したらいいだろうか。

最初の体験以降、この感覚に見舞われるたびに、事後的にその感覚に対する振り返りを継続させてきた。そうした継続的な振り返りのおかげか、この感覚の正体が少しずつ明らかになり、自分にとっては何ら異質なものではなくなりつつある。

当時は、この感覚を超越的な視点から自らを眺めるという性質上、メタ認知の極致のようなものとして捉えていた。しかし、その射程と深さは、一般的にメタ認知と呼ばれているものの範疇を遥かに凌駕するため、メタ認知の極致という表現も適切ではない。

認知するものとされるものが間違い無く一つの世界に溶解し、気づくものと気づかれるものが一つになっている感覚なのだ。そのため、この感覚の中において、世界を眺める自己は存在しておらず、メタ認知を発動させようとする者もないのだ。

意識の形而上学における「非二元の意識状態」とはこうした感覚を生み出す意識状態のことを言うのであろうか。頻繁に訪れるようになってきているこの不可思議な感覚をより丹念に観察してみたいと思った次第である。観察の前に引っ越しの準備が先だと思うが。

229. 言葉の沃野に飛び込んで

—太初(はじめ)に言葉あり—ファウスト

言葉の世界というのは実に肥沃な大地である、と最近強く思う。時にあまりに広大で、特に掴み難く、その大地を歩む者を惑わせる。一方で、言葉の沃野には、私たちの心を豊かにしてくれるものが眠っていることも間違いないだろう。

構造的発達心理学の根幹原理に、「私たちは内面の成熟に応じて、言葉の捉え方や使い方が変容していく」というものがある。これはまさにそうである。私たちの意識が発達していけばいくほど、こ

れまで捉えられなかった世界を認識できるようになり、そこに新たな意味を見出したり、新たな意味を築き上げることができるようになってくる。

しかしながら、もはやこうした説明では納得のいかない自分がいることをすでに知ってしまったのだ。私たちは内面の成熟に応じて、確かに言葉の捉え方や使い方が変容していくというのは分かる。

しかし、それ以上のものが内面の成熟には潜んでいると思うのだ。「言葉の捉え方」や「言葉の使い方」という次元ではなく、言葉を内側から生み出すそのあり方そのものの変容、「言葉」とそれを生み出す「経験」の同時的な変容と言ってもいいだろうか。

本来、言葉というのは自己の経験と密接に結びついていなければならないと思う。そもそも、自己の経験と結びついていない言葉には、言葉としての力はないだろう。正気と活気を持つ言葉には、必ず経験が密に込められている。

そこで私は、自分を捕らえて止まない言葉の起源へ遡ってみたいと思ったのだ。例えば、「成長」「発達」「成熟」「時間」というのは私を惹きつけて止まない言葉であり、それらの言葉を最初に生み出した人物の内側の経験はいかなるものであり、いかにどのものであったのかを辿ってみたいと思ったのだ。

そして、単にそれらを遡るのではなく、私自身の経験を通してそれらの言葉の起源を辿ることによって、何か普遍的なものを獲得することができるのではないかと思っている。あるいは、それらの言葉が持つ本源的なものを回復することにつながるのではないかと思うのだ。

そのためには、自らの経験をかけてそれらの言葉を内側から捉え直す必要があると思った。

私たちの内面はよく宇宙に喩えられる。仮に私たちの内面が宇宙空間のようなものであるとしたら、私たちの経験は、私たちが住む地球のような存在なのかもしれない。そして、経験という地球の中に、言葉という肥沃な大地が生まれるのかもしれない。

そうだとするならば、内面の成熟(意識の発達)というのは、地球を取り巻く宇宙空間の質的な変容に他ならないのではないだろうか。この変容を持ってして、私たちの経験と言葉にも変容が起こるだろう。

私はあえて経験の変容と言葉の変容を分けて、自分の中で生じるそれら二つの変容過程を観察し、探求していきたいと思うのだ。仮に内面宇宙というものが人知を超えたものであるならば、そして経験という地球すらも自分を超えたものであるならば、少なくとも自分が用いる「言葉」という肥沃な大地から探求を始めたい。

言葉を探り、言葉を生み出す経験にまで徐々に降りていく。言葉の探求によって経験に光を当て、光の当てられた経験はまた新しい言葉を生み出す。この探求の先に、経験と言葉を生み出す人知を超えた存在に辿り着くのではないか、という気持ちを胸に秘めているのだ。

230. カート・フィッシャー5つの変容原則:「統合化」と「複合化」

極端に暑い日と比較的涼しい日が入り混じった不思議な時期である。夏という秩序だった季節が到来する前の最後の混沌状態にあるのかもしれない。そんなことを今朝思った。

記事217で紹介した「知性や能力の発達に関する5つの変容原則」について、一つ一つの原則をより詳しく解説したい。再度確認すると、私たちの知性や能力が発達する際には(1)統合化(intercoordination)、(2)複合化(compounding)、(3)焦点化(focusing)、(4)代用化(置換化: substitution)、(5)差異化(differentiation)という5つの変容原則のいずれかが当てはまる。

統合化(intercoordination)と複合化(compounding)は一見すると似たような姿をしているが、「統合化(intercoordination)」は既存の能力レベルから新たなレベルへの発達の際(マクロな発達)に適用される原則である。一方、「複合化(compounding)」は既存のレベル内における種々の能力が組み合わさる際(ミクロな発達)に発揮される原則である。

簡潔に述べると、統合化(intercoordination)はある能力レベルから次のレベルに移行するという「垂直的な発達」に際して見られる現象であり、複合化(compounding)は同一能力レベル内における量的拡大という「水平的な発達」に際して見られる現象である。

上記の概略は以前の記事で紹介したものと同一のものである。ここからはもう少し踏み込んでこの二つの変容原則の特徴について見ていきたい。

原則1:統合化について

カート・フィッシャーの発達モデルにおけるレベル0から12までの発達プロセスにおいて、統合化は一つのレベルから次のレベルに飛躍する時に必ず見られる現象である。これは、複数の原子が一つの分子を形成する様子と似ている。複数の原子が結合し、質的に全く異なる一つの分子が生まれる姿をイメージしていただきたい。

統合化にもプロセスがあり、統合化の初期の段階において、私たちがaとbという二つの能力を持っていたとする。それまでは、それらの能力は別々に発揮されていたが、取り巻く環境がそれらの能力を組み合わせることを要求してきた場合に、私たちはそれら二つの能力を関係付けようとする。

その後、それらを関係付ける過程を経て、徐々に二つの能力が組み合わさった形で発揮され始め、あるところで完全に統合されて発揮されるようになる。統合化が完成すると、レベルLにあった二つの能力aとbは、レベルL+1にある新しい一つの能力dに結晶化される。そのイメージは「 $a*b=d$ 」という数式で表され、統合化とはつまり、左の式における「* (掛け算)」の記号を意味するのだ。

例えば、「キーボードを実際に目で見ながら打つ」という能力と「打たれた文字がパソコンの画面上で正確に記載されているかを確認する」という能力を別々に発揮していた状態から、両者を掛け合わせることによって、「ブラインドタッチ」という新たな能力が生まれるというのは、統合化の一例だろう。

ブラインドタッチという新たな能力が生まれた際には、キーボードを目で見ながら打つという能力が質的に変容し、もはやキーボードを見る必要性がなくなっている。ここではつまり、構成要素の能力にも質的な変容が起こり、二つの能力の単純な総和がブラインドタッチという新たな能力を生み出しているわけではないのだ。

統合化のプロセスの本質は、私たちにとって一見すると逆説的に思える。例えば、与えられるタスクのレベルがLであり、持ち合わせている能力のレベルはL-1である場合、基本的にはそのタスクを遂行することは不可能である。しかし、統合化はこの不可能なことを可能にしてくれるのだ。

つまり、持ち合わせている能力のレベルがタスクレベルより低くても、レベルL-1の能力を複数統合させ、レベルLの能力を形成することができればそのタスクを遂行することができるのだ。

ただし、注意が必要なのは、統合される能力の各々が成熟したものでなければならないということだ。どういうことかと言うと、aとbの能力がともにL-1のレベルに到達している必要があり、両者のレベルがL-2である場合や片方の成熟が不十分である場合には統合化は起こらず、単なる融合しか起こらない。

もう一つ重要なことは、統合化のプロセスは時間をかけて成し遂げられるということである。統合化の基盤となる一つ一つの構成能力が成熟するためにも時間がかかるし、何より二つの能力がバラバラに発揮されていたところから、完全に統合されて発揮されるようになるまでに時間がかかるのである。

そして興味深いのは、統合化のプロセスは連続的であるが、次のレベルに移行する瞬間は非連続的であり、大きな跳躍の瞬間だということである。まさにこれは、発達に伴う「大いなる飛躍」と形容してもいいだろう。

最後に、「統合化」という名前の由来についても言及しておきたい。二つの異なる能力を単純に並列化させて発揮する場合には、新たな能力レベルが発現することはなく、二つの能力が相互作用を生む形で結合して初めて、質的に異なるレベルに移行するのだ。

能力の発達に伴う大いなる飛躍は、能力の質的な変容であり、それは単に能力の量的な拡大ではなく、構成能力の単なる組み合わせでもないことから「統合化」と呼ぶのがふさわしいだろう。

原則2:複合化について

複合化という変容原則は、能力のマイクロな発達を説明する際に用いられることが多い。先ほどの「統合化」との違いをもう一度確認すると、統合化は能力の質的な変容、つまり「垂直的な発達」を示唆するものであるのに対し、複合化は能力の量的な拡張、つまり「水平的な発達」を表すものである。

先ほどのように記号を用いて説明すると、複合化においては、レベルLにおけるaとbという二つの能力が組み合わさり、同様のレベルLにあるより複雑な能力cとなる。このイメージは「 $a+b=c$ 」と表すことができ、「+」の記号が複合化を示す。

統合化と同様に、複合化は有機体要因と環境要因によって引き起こされる(有機体要因と環境要因については記事217を参照)。つまり、複合化が起きるためには、そもそもaとbという二つの能力を兼ね備えておかなければならないし、ある環境においてそれらを組み合わせで発動させることが迫られている必要があるのだ。

ポイントは、統合化では二つの能力が組み合わさることによって、一段上のレベルの新たな能力が出現したが、複合化では二つの能力が組み合わさることによって、それらの能力と同一レベルの新たな能力が生まれてくるということである。

例えば、聞いた内容をメモする能力というのは、聞いた内容を理解する能力と文字を書く能力の単純な合算であり、複合化の例だろう。先ほどのブラインドタッチの例と異なり、聞いた内容をメモする能力を発動させる際に、その構成要素には質的な変容が伴わない。二つの能力の単なる総和によってメモする能力が生み出されるため、これは複合化と言える。

複合化は何も二つの能力の組み合わせに限らず、それ以上の数の能力を組み合わせる時にも生まれる。多くの能力を組み合わせる際に重要になるのは、それぞれの能力に習熟し、それらが無意識的に発動できるようになる必要があるということだ。

人間の記憶量には限界があり、意識的に作動させることのできる能力の数には限りがあるということを見ると、無意識的に能力が発揮できるまでに修練を積むことが大切となる。また、レベルL+1の能力dと下位のレベルLの能力eを組み合わせ、レベルL+1の能力fを生み出すことも可能である。

複合化は、比較的大きなマイクロな発達プロセスで起きるという特徴を持つが、変容原則の(3)焦点化(focusing)と(4)代用化(置換化:substitution)は、より小さなマイクロな発達プロセスで起こるという特徴がある。この点も含めて、また別の機会に残りの変容原則について紹介していきたい。

231. 熟成

—待つしかない、か—竹内敏晴

音楽、絵画、スポーツ、学問にせよ、長大な時間の鍛錬の末に到達した境地には、共通して美的なものが広がっている気がしてならない。四年に一度のスポーツの祭典、オリンピックの開催日が迫ってきている。今回のリオ五輪ではどのような美が顕現されるのだろうか。

元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーが実証研究で示したように、知性や能力の発達には長大な時間がかかる。また、フィッシャーが実証研究で示したもののの中で極めて重要な意味を持つのは、「ピアジェ効果」と呼ばれるものだ。

ピアジェ効果とは、一言で述べると、小さい頃に無理に知性や能力に関する発達を強いられていた場合、二十歳を過ぎるあたりでピタリと発達が止まってしまうという現象を指す。もちろん、傑出したピアニストやスポーツ選手などは幼少期から相当なトレーニングを積んでいるだろう。

彼らには、そうしたトレーニングに耐えられるだけの資質があったのだろうし、何よりもそうしたトレーニングを苦しめない才能のようなものがあったのだろう。ピアジェ効果が示しているのは統計的な解釈であって、そうした才能を持った人物のような例外的なケースは除外されていると言える。

つまり、ピアジェ効果は全ての人に当てはまるわけではないということを理解しておく必要があるのだ。ピアジェ効果が当てはまるのは、子供達の適性や個性を考慮せず、過度に早期英才教育を押し進めた結果として引き起こされる現象なのである。

その人の適性や個性を無視した弊害は、何も子供達の発達だけに当てはまるものではなく、私たち成人の発達にも当てはまると思っている。一般的に、より高度な段階に近づけば近づくほど、発達速度は遅くなる。

知性や能力の次元が上がれば上がるほど、その次の次元に到達するためには多大な鍛錬と時間が必要となるのだ。その理由は、新たな段階で習得すべきものの量が単に増加するだけでなく、そこで解決すべき課題の難易度も高度化するからである。

要するに、成人期において知性や能力がゆっくりとしか発達しないのは必然的なのである。こうした必然性を無視して、過度に発達を促進しようとした場合、その人の発達の形(道筋)は歪んだものになってしまう危険性がある。

私たちには、各人固有の「発達時計」なるものが備わっている気がする。これは、必要な発達段階に必要な発達時間をかけて辿り着くための時計である。ここでご自身の経験を振り返っていただきたいのだが、「時差ぼけ」を経験したことはあるだろうか？

飛行機などで日付変更線をまたぐような長期移動を強いられた時、私たちの体内時計は狂ってしまう。これは内側で流れる時間感覚が無理に改竄されることによって起こるのだと思う。

事情はほとんど同じである。内側の時間感覚に強引に手が加えられた時、時差ぼけが生じて体内時計が狂ってしまうのと同じように、発達速度を強引に変えようとする働きかけがあった時、私たちの発達時計は狂ってしまうのだ。

そもそも、「ピアジェ効果」という実証結果がフィッシャーによって提示される遙か前から、「slower is better(発達はゆっくりの方が好ましい)」という考え方は存在していたのである。私の知る限り、明示的にこの考え方を述べていたのは、ジャン-ジャック・ルソー(1712-1778)だと思う。

ルソーは「人間の発達プロセスは、私たちが思っているよりもゆっくりである」ということを300年近くも前に提唱していたのだ。ルソーのこうした考え方を受け継ぎ、研究を進めていったのがアーノルド・ゲゼル(1880-1961)だろう。

ゲゼルは元イェール大学教授であり、子供の発達研究の大家でもあった。ゲゼルは、子供(人間)には自己規制メカニズムが内在的に備わっているため、子供は新しいことを大量に学ぶことに対して何かしらの抵抗を示すということを明らかにした。

言うまでもなく、これは外面的(行動的)な抵抗というよりも、目には見えない内面的な抵抗である。つまり、あまりに多くのことを詰め込まれすぎないように、子供達の内側にある何かは警告を発するのだ。

発達を急かされることに対する内側の抵抗は、成人にも当てはまるのではなかろうか。発達支援をする側と支援を受ける側の双方が、早急な発達を拒絶する「警告」に気づかない時、それは悲劇を生むと思うのだ。

成人の発達支援をする際に、いつも厄介な問題は、成人の発達には膨大な投入量の鍛錬が必要でありながら、無理に発達を促進することには危険性が付きまとうということである。私たちが知性や能力を高めるためには、今発揮することのできる最大限の力を振り絞って圧倒的な鍛錬を積む必要があるのは確かである。

そこで大切になるのは、発達速度を見極める支援者側の慧眼と、自分の発達時計のリズムを正確に理解し、膨大な鍛錬を乗り越えていけるだけの内発的な原動力を当人が兼ね備えていることだと思う。

己のたゆまぬ研鑽と対人的・環境的支援を得た後は、それらが熟成するために寝かせる必要があるのだと思う。あとは待つことしかないのではないだろうか。

232. 実相

いつも記事の内容に合わせた写真や絵画、もしくはその時の自分の気分を代弁してくれる写真や絵画を添付している。これまでの記事に添付された写真や絵画を改めて眺めてみると、非常に変化に富んでいることに気づかされる。

写真や絵画が肯定的・否定的なものであろうと、いずれにせよ治癒的な効果を私にもたらしてくれていることを実感する。実際に写真や絵画として自ら表現する方が望ましいのかもしれないが、それらを眺めているだけでも治癒的な効果があるというのは有り難いことである。

この一年間は、大量に専門書を読むことが続いていたように思う。8月からは研究者としての専門的なトレーニングを再び開始し、そこでは書籍よりも学術論文を大量に読むことが求められると想定されていたため、これまでの時期はあえて論文から離れ、専門書籍を読む方向に舵を切っていた。

発達科学の領域のみならず、他の領域もおそらくそうであろうが、基本的に最先端の学術的成果は書籍にはあまり反映されていないと思う。つまり、その分野で現在話題になっている研究テーマや最先端の知見というのは、書籍を読んでは得られないのだ。

特に知性発達科学の分野に関しては、30年以上も前のパラダイムに則った発達理論（例えば、ロバート・キーガンやウィリアム・トーバートの発達理論）がようやく日本で紹介され始めているという状況にあるのだ。ケン・ウィルバーのインテグラル理論を母体とする発達理論もそうした一昔前のパラダイムのものであるため、それらに基づいて知性や能力の発達について考察を深めたり、実践を進めていくことには大きな限界があるように感じている。

日本の翻訳文化の豊饒さには目を見張るものがあるが、そうした文化に安住し、翻訳書に頼りすぎるのは「他者依存的」な探究を助長しているように思う……。そのようなことに思いを馳せながら、今朝も特殊な意識状態に参入した。

不思議な意識状態が継続している。目に映るもの、耳に聞こえるもの、身体と意識に入るそれら全てのものが常に真新しいものとして感じられるのだ。

見たことのある景色、見たことのあるもの、聞いたことのある音、食べたことのあるもの、本来すでに経験済みの烙印を押してしかるべきものたちが、なぜか等しく新鮮なのだ。新生児が日々新しいものと接するかのごとく、今の私にとって、取り巻く全てのものが新しい。

昨日、「電車」というものを見た。この電車はこれまで何度も利用したことのあるものであるし、「電車」という概念が一体何を指すのかも把握しているつもりであった。しかし、その電車が突如、非常に新鮮なものとして自分の内側に入り込んできたのである。

より正確には、これまで見逃していた「その電車を電車たらしめている“電車性”」にハタと気づいた感覚である。そこに私は、電車の実相を見たような気がした。

電車の実相を目撃したまま、その電車に乗車し、私は街に向かった。その街もこれまで何度も訪れたことのある場所である。そこでもまた全てのものが実相を輝かせていた。

道行く人たちの顔がなぜ全て違うのかとても不思議であったし、それら全ての人が持つ“その人性”というも実に多様であることを改めて発見した。そうした差異を見つめながらも、そこには人間に共通の普遍的な何かも同時に開示されているような気がしたのだ。

いずれにせよ、見慣れたはずの街が真新しいものとして体験されるということ、道行く人たちの実相が開示されるという体験もまた自分にとって新しいものであった。

この不思議な意識状態は、深い夢を見ている感覚に近いのかもしれない。私たちは深い夢を見ている時、私たちの小さな自我は溶解している。あるいは、私たちの自我は深い夢の中でくつろいでいると言える。

深い夢の中で覚醒しながら生きている感覚。深い夢の中で覚醒していることに自覚的な自分を通じて毎日を過ごしている感覚。今の自分の日常感覚はそのように表現されるかもしれない。

233. 焦点化・代用化・差異化という三つの変容原則

記事217と230で紹介した「知性・能力に関する5つの変容原則」について、残りの原則をより詳しく解説したい。まだ説明していない原則は(3)焦点化(focusing)、(4)代用化(置換化:substitution)、(5)差異化(differentiation)である。これらの論点はいずれも若干細かいが、能力の発達プロセスを理解する際や発達支援をする際に大切となる原則であるため、ここで紹介しておきたい。

原則3:焦点化について

焦点化(focusing)の特徴を一言で述べると、それはあるタスクをこなすために必要となる能力を私たちが即座に選び抜くことを可能にしてくれる。これはいわば注意点の移動と密接に関係していると言える。そのため、焦点化が扱う現象には、どのレベルのどのような能力を抽出するかという発達的な変化のみならず、一瞬一瞬の行動の変化も含まれる。

ある状況において特定のタスクをこなす際に、私たちは潜在的に多様な能力を活用することができ、一般的にそれらの能力はお互いに関係し合っている(例:経営戦略を立案する際には、市場分析能力や論理思考能力といったお互いに関係し合った能力が立ち現れ、そこでは料理をする能力や歯磨きをする能力は問われない)。

焦点化はある意味では、ある状況において特定のタスクをこなす際に、多様な能力から最適なものを選び出す「選択化(その状況に相応しい適切な能力を選び出す能力)」と言い換えてもいいだろう。要するに、焦点化は、その状況や与えられたタスクをこなすのに最適な能力を選び出し、その能力を意識的に活用することができる力だと言える。

「ルビンの壺」のような騙し絵が教えてくれるように、私たちの顕在意識は皮肉なもので、複数のことに対して同時に意識を与えることはできないのである。意識の焦点が当たるのはごく少数のことであり、意識的に活性化させることのできる能力の数もごくわずかであり、それを抽出する力が焦点化なのだ。

「二兎を追う者は一兎をも得ず」という格言にあるように、顕在意識の中でバラバラな二つの能力を意識的に同時活用することはできないのである。

原則4:代用化について

代用化(substitution)は、ある能力を一般化させて他のタスクに対して活用する、あるいは他の文脈内で活用する際に発揮される。代用化というのは、ある種の一般化を伴う変容原則であると言っていいだろう。

つまり、あるタスクに対してレベルLの能力を獲得することができたら、同様のタスクに対してその能力を移転させることができるのだ。あるタスクにおける構成要素と別のタスクの構成要素がほとんど同じである場合、あるタスクをこなす際に獲得されたレベルLの能力が一般化され、別のタスクに対して応用されることになる。

要するに、あるタスクと別のタスクが同レベルであり、なおかつタスクを構成する要素がほとんど同じである場合に、あるタスクで獲得した能力を別のタスクに対して代用化させることができるのだ。例

例えば、ピアノの演奏を例にとると、演奏の難易度がほぼ同じであり、曲の構成やリズムなどの構成要素が近似している場合、ある楽曲を演奏できた能力がそのまま別の楽曲の演奏に転用することができるのだ。

仮に、代用化がピアニストの中で一切生じなければ、そのピアニストは演奏曲のレパートリーを増やすことができない。しかし、一曲しか弾けないプロのピアニストなどはこの世にいないであろう。つまり、ピアニストは鍛錬の中で知らず知らず「代用化」という能力の変容原則の一つを常に活用しているのだ。そして、これは全ての職業にも等しく当てはまると思う。

原則5: 差異化について

「差異化(differentiation)」というのは、能力の構成要素が分化することである。差異化は常に他の変容原則、特に統合化と複合化(記事230参照)と密接に関わっている。発達心理学者のハインツ・ワーナーが指摘しているように、差異化と統合化は常に同時に起こるのだ。フィッシャーもこの考え方を採用し、差異化と統合化は補完的な関係にあると述べている。

差異化は、他の変容原則に依存しながら、ミクロな発達かマクロな発達となりうる。マクロな発達に関して、差異化の程度は非常に大きく、レベルLの能力の構成要素(例:a, b, c)はその能力がレベルL+1に到達したら、質的に異なる構成要素(例:a', b', c')に変容する。そして、その能力レベルに習熟すればするほど、それらの新しい構成要素を巧くコントロールできるようになり、統合化の道が開かれていくのだ。

ここで、差異化は単なる「分離化」とは意味が異なることに注意が必要である。分離化は、能力の構成要素を分割することにとどまるが、差異化は統合化や複合化と不可分なものであるため、能力の構成要素を分割しながらもまとめ上げる働きがそこに内在しているのだ。

例えば、キーガンの発達理論を理解する際に、五つの段階モデルや螺旋上の発達プロセスなどの概念に分割して理解すると同時に、それらを一つの全体として「キーガンの理論体系」と理解することが例として挙げられる。

要約として、5つの変容原則の順序がわかれば、ある能力の発達の順序がわかることになる。順序がわかれば、当然ながら能力の発達を予測することも可能になるであろうし、より効果的な発達支援を実現させることも可能になるだろう。

234. 安全基地と帰還場所

この二日間は五時前に目が覚め、身体と精神ともに調子がとても良い。早朝の覚醒と同時に、自分の身体と精神が新たなものに変わっている気がする。

睡眠というのは、身体と精神を回復させるのみならず、そこには身体と精神を再構成する働きのようなものが存在するのではないかと思わされる。目覚めとともにカーテンと窓を開け、注ぎたての太陽光と吹きたての朝風を取り入れる。

影も形も見えない小鳥たちが心地よい鳴き声を発している。その声に耳を傾けながら、そういえばセミの鳴き声はまだ聞こえて来ないことに気づいた。夏という季節を象徴し、自分が夏の季節にいるのだという確かな感覚をもたらしてくれるセミたちの到来が待ち遠しい。

セミというのは、私たち日本人にとって、夏という季節が今ここにあるということを教えてくれる教師なのかもしれない。そして、彼らは、夏という季節に私たち自身の全てを預けても良いという安心感を与えてくれる存在のような気がするのだ。

イギリスの心理学者かつ精神科医のジョン・ボウルビィ(1907-1990)は、子供が健全な発達を遂げていくためには、幼児期の時に少なくとも一人の養育者(一般的には母親)と親密な関係を構築する必要があるという「愛着理論」を提唱したことで有名である。

幼児は愛着の対象者である養育者を「安全基地」として、つまり自らの精神的拠り所として、世界を果敢に探求するようになり、何かあれば再び安全基地に戻ってくることができるのだ。世界の探索に安全基地が必要であるというのは、何も子供の発達だけに当てはまることではなく、成人の発達にも当てはまる。

これだけ世界が錯綜とし、複雑混迷を極める最中、己の精神的拠り所なくして積極果敢にこのリアリティを探究していくというのは難しいように思う。とりわけ発達段階が高度になればなるほど、それだけ探求の難易度も高度化するため、直面する課題を乗り越えていく際に、強固な精神的立脚地のようなものが必要だと思うのだ。

おそらく、どのようなものが安全基地として働くのかは、発達段階に応じて異なるものだろうし、またタイプ論的な個人差もあるだろう。ここ最近、自分にとっての精神的拠り所とは何なのか？自分が帰還する場所は何であり、どこなのか？を考えさせられる状況に置かれている。

そうした問いを自らに投げ入れてみたときに、ある一つの過去の記憶が自分にぶつかってきた。それは、米国生活の二年目の途中に訪れたマサチューセッツにあるボストン美術館で見たあの仏像であった。当時の自分は、西洋的なもの、特に米国的なものに圧倒されながらもそれと向き合い、それを自分の内側に取り入れることを強いられていた。

ボストン美術館に足を運んだことの発端は、西洋的なものに触れ、それを自分の内側で何とか折り合いをつける作業の一環だったのかも知れない。そこで自分が心を打たれたのは、西洋的な絵画作品や彫刻品ではなく、疑いようもなく、あの東洋的な香りを漂わせる仏像だったのだ。

この仏像と対面した時、私は自分の存在が消え去ってしまうぐらいの何かに抱擁されたという感覚があったのだ。実際に、そこには私の小さな自我などもはや存在していなかった。

結局のところ、私は日本という国そのものというよりも、日本の大地そのものというよりも、日本的なものを自身の精神の大いなる拠り所としていることに気づかされたのだ。これから私はこの拠り所を頼りに、遙か彼方にある物理的・精神的な場所に赴き、再び日本的な何かに帰還することになるのだと思う。

結局それは自己に帰還することなのか、自己を超越した何かに帰還することなのか、今の自分は知らない。

—真に考え抜き、真実に生きたことだけが人間を打ち、人間を打ったものだけが人間の遺産となる—
—辻邦生

頭の中で地球儀をぐるりと回してみる。日本とオランダの距離を頭の中で推算してみた。それに付随して、地球の円周と直径の長さについても推算してみた。

推算の結果、それなりの概算値が出てきた。その概算値は有理数である。その有理数を導く際に使用した円周率という無限に続く無理数の存在に気づいた時、思わず声を上げそうになった。というのも、有理数と無理数が隠された地球という不思議な球体上をフライトで移動することになるとわかったからだ。

渡欧に際しての機内で読もうと思っていた本がある。それは、辻邦生先生(1925-1999)の著書『パリの手記』である。全五巻にわたるこの書籍は、辻先生が30代前半でパリに渡られた時の様々な出来事や思索の過程が書き残されている日記である。

成田からフランクフルトに向かうどこかのタイミングでこの本を読もうという心積もりでいたが、その日を待つことができず、結局全てを日本滞在中に読み終えてしまった。辻先生がこの日記を書き始めたのは、ご自身が32歳ぐらいの時であったため、今の私の年齢と近いものがある。

この日記には、真の小説家に変貌しようとする辻先生の並々ならぬ想いと探究の過程が克明に記されている。私は文学に関しては門外漢なので、その手の記述に理解がついていかないこともあったが、言語で内と外の現象を表現することの意義やその手法に関する記述には感銘を受けることが多々あった。

一方、この日記がまだ30代前半の辻先生によって執筆されたという都合上、精神的な若さの目立つ表現が散見され、「辻先生にも若い時があったのだ・・・」という当たり前のことに気づいた。この日記を読むことによって、辻先生はここから内面的成熟への旅を始められたのだとしみじみと感じた。

成熟への足取りを確認するかのごとく、日記を書き記していった辻先生。その日記は、パリという異国の地で小説家としての才能を何としてでも開花させようとする尋常ではない気概と苦悩で満ち溢れている。

この日記から得られたことは多岐にわたるため、全てを紹介するのは難しいが、一番感銘を受けたのは、自分の全存在をかけて何かに取り組むことの意義と尊さだろう。一人の小さな人間がその全存在と長大な時間をかけて何かに取り組むとき、超越的な何かがそこに生み出されるのだという確かな感覚が今の私の中にある。これは消し去ることも譲ることも揺るがすこともできない確信である。

昨日のランニングの途中、近所の大きな神社を訪れた。お参りを済ませ、鳥居を抜けたその瞬間、なぜだか私は、有限なるものが無限なるものに変貌しうるということを直感的に知った。自らの生命や資源に限りがあるという有限性に真に自覚的になり、その自覚の下に全精力を傾けてなされる行為を積み重ねていった結晶体は、無限なるものに変容するのだという確かな思いがやって来たのだ。

有限なるものの最良の結晶体は永遠性を帯びるということだ。ひたむきさの中に無限を見出したという感覚に襲われた、と言ってもいいだろう。

こうした感覚を呼び起こす触媒となったのは辻先生の存在だったのかもしれない。あるいは、そうしたことを感じざるをえない所に私を導いてくれた内なる促しがあったせいなのかもしれない。

有限なるものと無限なるものとの邂逅。己の生命の有限性を深く自覚し、己の使命に対してひたむきに打ち込んだ産物は永遠なるものとして、無限なるものとして、時空を超えて受け継がれていくのだと確信した。今の自分にとって、生きる意味はそこにあり、それ以上のものはない気がするのだ。

生きる意味を見出せたことは今の自分にとって非常に大きな出来事であった。

236. 知識と言語の照明作用

知識があることによって初めて見えてくることがある。逆に知識があることによって、その知識に沿った形でしか物事が見えなくなってしまうことがある。

確かに知識は私たちの認識を制限するという働きを持つが、制限をかけることによって、初めて何かが開示されるという知識の「照明作用」を私はより尊重している。

混沌とした暗闇の現実世界に光を与え、その光によって初めて可視化される現象に気づかせてくれるのが知識の照明作用である。

昨日、外出先のカフェでアイスコーヒーを頼んだ。東京もだいぶ夏らしくなっている。注文したアイスコーヒーにミルクを注いだ時、少しばかり神妙な気持ちになった。

なぜなら、ミルクが注がれたアイスコーヒーに熱力学第二法則を見たからである。一滴一滴注がれたミルクは、アイスコーヒーの中に拡散していき、もはや二度と先ほどのミルクに戻ることはないのだ。

注文したアイスコーヒーの中に広がっていくミルクのエントロピーはどんどん増大していき、元のミルクに戻ることはないという不可逆性に対して神妙な気持ちになったのである。

善かれ悪しかれこうした気持ちを引き起こしたのは、物理学の基礎的な知識であった。神妙な気持ちを抱えたまま私はオフィス街へと向かった。そこでもまた、ある知識によって開示される事象に気持ちを揺さぶられたのだ。

皆さんは、この季節に日本のオフィス街に大量発生しているある生物をご存知だろうか？少しばかり思いを巡らせていただきたい。その生物名は「パンツマン」と呼ばれる。

昨年、ひよんなことからスーツの勉強を少しばかりすることになった。スーツの歴史をあれこれ調べていると、ワイシャツというのは下着に該当するという知識を得た。ワイシャツというのは下着と同様のものであるため、公式の場ではジャケットを着用するか、ワイシャツという下着を隠すようにベストを羽織る必要があるのだ。

つまり、ワイシャツ姿で公共の場をうろつくというのは、下着姿で公共の場をうろつくのと等しいのだ。幸か不幸かこの知識が私の認識世界を新たに構築し、オフィス街の中をワイシャツ姿で颯爽と歩くビジネスマンに対して、「あっ、パンツマンだ」と心の中で唱えてしまう自分が常にいる。

要するに、ワイシャツが下着と同様のものであるという知識によって、私の認識世界は制限されてしまっているのだ。しかしながら、この知識も有益な側面を持つ。

暑い季節に神経が逆立ちやすくなってしまうかもしれないが、ワイシャツ姿でうろつく人を見かけたときに「パンツマン」という言葉を当てることによって、ユーモアに満ちた笑みが自然と溢れてきて神経が落ち着くかもしれない、という効用がこの知識にはあるだろう。

ジョン・エフ・ケネディ大学に留学していた時に受講した「脳神経哲学」というクラスの中で、イギリスの神経学者オリバー・サックス(1933-2015)の“Musicophilia: Tales of Music and the Brain (邦訳「音楽嗜好症：脳神経科医と音楽に憑かれた人々」)”という書籍が取り上げられたことがある。

私たちには何かしら、もはや忘れることのできない青春時代の音楽や心身にまで染み込んでしまったかのような聞き慣れたクラシック音楽があるだろう。それらの音楽のメロディーを心の中でどうして完全に再現することができるのか、不思議でたまらなかったことがあったのだ。

そうしたことを考えている時にふと、1980年あたりに一世を風靡した「YOUNG MAN」という西城秀樹氏のシングル曲を思い出した—ヤングマン さあ立ち上がれよ ヤングマン 今翔びだそうぜ ヤングマン もう悩む事はないんだから(続く)。その曲の歌詞に出現する「ヤングマン」という単語を全て「パンツマン」に変換して頭の中で曲を再び流すと、オフィス街で立ち込める不快な暑さもだいぶ和らいだように感じた。

こうしたユーモアをもたらしてくれるのも、特定の知識があつてこそだろう。

上記のように、知識があることによって、私たちは世界を新たに見つめることができるようになる。知識のこうした照明作用と同様に、言語にもほぼ同様の照明作用があるように思う。

ある工夫を施してから、オランダ語の学習が実に楽しいものとなっている。「外国語学習ノート」を作成し、左から順に英語、オランダ語、ドイツ語、フランス語の欄を作り、4ヶ国語を同時に学習するようになってから、オランダ語の学習に喜びを見出し始めている。

また、夕食後の1時間はオランダ語の学習に充てるということを習慣にして以来、自分の言語世界の中で少しずつ構築されていくオランダ語の建造物を見るのが楽しみの一つになっている。さらに、英語、オランダ語、ドイツ語、フランス語という4ヶ国語を同時に学習することによって、各言語が持っている独特の音の響きが何より面白い。

4ヶ国語の異なる音の響きを聞くことは、多様な音楽を聴いているような感覚になる。そして音のみならず、各言語が持つ形も大変興味深いのだ。

これからの欧州生活の中で、やはり核となるのは依然として英語であることに変わりはないだろう。実際に、フローニンゲン大学で私が所属するプログラムの授業は全て英語で展開され、教授や同僚との議論も基本的には英語で行われる。

つまり、込み入った話に関しては英語で十分なのだ。そのため、複雑な話題をオランダ語で表現する必要はなく、短いセンテンスのやり取りで構築される日常会話空間でのみオランダ語を使えば良いという状況にある。

そうした事情から、自分のこれまでの経験上、数秒以内、数分以内で展開される日常会話で頻繁に用いられるセンテンスのみを、オランダ語でも表現できるようになることを当面の目標とした。例えば、現在の自分の社会的立場を表明するときに、“I’m a graduate student.”という表現を用いることが頻繁に出現するということを予想している。そのため、これをオランダ語、ドイツ語、フランス語でどのように表現するのかを押さえていくように学習を進めている。

ちなみに、“I’m a graduate student.”という英語表現を他の言語で表現すると、オランダ語では“*Ik ben een afgestudeerde student.*”と表現され、ドイツ語では“*Ich bin ein Student.*”と表現され、フランス語では“*Je suis un étudiant diplômé.*”と表現される。

オランダ語の「*afgestudeerde*」という単語の中で用いられる「*g*」の音は非常に特徴的であり、“*Ik ben een afgestudeerde student*”というセンテンスを何度も聞いていると、その響きが心地よくなってくるから不思議である。また、四つの言語の形を比較してみると、これまた絵画作品を眺めているかのような気持ちになる。

今は、こうした音や形の多様さに対する純粋な好奇心によって外国語学習が進められていると言える。ある言語がわかることによって初めて見えてくる世界が存在しているというのは、英語を学習することによって強く実感したことである。そのため、これからオランダ語を学習することによって、どのような認識世界が開拓されていくのかを楽しみにしている自分がいるのは確かである。

237. 孤独さと個の確立について

—孤独、絶望、死。これらは決して悲壮がった脅し文句ではないのだ。人間の魂のカリテ(質)なのだ。どうしてもそこへ行かなければ、先へ向かって開けないものがあるのだ—森有正

一羽のハトが公園内の道をひよこひよこ横切っていた。ハトの足取りのリズムと同調させるように、私はそのハトの横を走っていく。そのハトは自分が一羽の固有のハトであるという認識はあるのだろうか。

ロバート・キーガンの言う発達段階4(自己主導段階)というのは、自分独自の価値体系を構築し、ある意味、自己の固有性に気づく段階だと言える。言い換えると、自分という存在はもはや替えのきかないものであり、この世界にたった一つの「個」として存在することを強く自覚する段階だと言える。

世間一般では「個の確立」が推奨されているが、その動きに対しては慎重であるべきだと思う。なぜなら、強固な個の確立というのは、孤独を引き受けることなしには成し遂げられないものだからだ。

自分がこの世界に替えのきかない存在であるということを真に理解し、一つの自我を確固たるものとして確立した時、そこにあるのは、孤独以外の何ものでもないのではないだろうか。このリアリティにおいて、たった一つの個として存在すること、それはまさに「個」が「独り」であることを意味するのだ。

「個に目覚める」というのは、孤独を自覚し、孤独を通じて生きて行くことに目覚めることだと思うのだ。発達段階4の自己を確立したと思った時、あるいはそこを通過したと思った時、そこに孤独がなかったのであれば、それは偽りの個の確立であると言えるだろう。

段階4を超えてからの発達においても、孤独という感情は消え去ることはないのだと思う。逆に、唯一の個であるという自覚と孤独感があるからこそ、段階4を超えた人たちは他者と積極的に交わろうとするのだと思う。

さらに、こうした意味での真の孤独感というのは癒されるものでは決してないし、それを内に抱え込んだまま先へ向かっていく必要があると思うのだ。確かに、孤独感を癒したいという気持ちは誰にでもあるだろう。

しかし、真の孤独感は決して癒してはならぬ感情だと思うのだ。なぜなら、それは人間が本質的に持つ感情だと思うからだ。いや、孤独こそ人間そのものの本質と言っていいかもしれない。癒されぬものだからこそ、拭い去ることのできないものだから、本質的かつ根源的なのだ。私が私に還るためには、絶対にこうした孤独が必要だと思うのだ。

孤独感を突き詰めた先に、超越的な何かが開けてくる気がする。安易にそこへ足を踏み出していくのは危険かもしれないが、孤独の極致には何かあるらしい。だが、それがどういったものなのかは、今の自分には分からない。

こうした意味において、個を確立することや自分探しの旅に迂闊に着手してはならないと思うのだ。

—孤独なしには、何一つ成し遂げることにはできない。私は、かつて私のために孤独を作った—
プロ・ピカソ

238. 深化に寄り添って

ここ最近、自分を感化させてくれる書物にはどのような特徴があるのかを考えていた。すると、ある一つの共通する特徴が浮かび上がってきた。それは、書物の文章を仮に私の認識の刀で斬りつけた時に、そこからその著者の血が滲み出るかどうかであった。

つまり、私を感化させてくれる書物は必ず、文章の一つ一つに著者の実存性がぎっしりと詰まっているのである。感銘を与えてくれる著者は常に、世界を単に外側から物語ることをせず、世界との関

係性の中に自己を位置づけながら、絶えず内側から世界を物語ろうとしているのだ。そんなことをふと思った。

当初、このウェブサイトは発達理論に関する学術的・実践的な話題を共有することを主たる目的として掲げていた。その背景には、成人発達理論に関する数多くの知見が日本ではほとんど知られていないということがあった。

つまり、日本と欧米を比較してみると、人間発達に関する情報格差が大きく存在しており、そうした溝を少しでも埋める一助になればと思ってこれまで発達理論に関する学術的な話題を共有してきたのだ。

この試みは私に課せられた一つの仕事だと認識しており、今後も継続させていきたいと思う。しかし、そうした試みと同時に、私も一人の人間として、発達理論を通じて生きたいと思うようになったのだ。

より正確には、人間の発達に関する三人称的な客観的記述のみではなく、発達理論を己の存在に適用した際に観察される自分自身の事柄にも等しく光を当てたいと思ったのだ。これまでの私の学術的な探究対象は常に他者であり、発達支援という実践も他者に向けてのものだった。自己を省みないというこうした姿勢の裏には、どこか自分に対する不誠実さが付きまとっているような気がしたのだ。

そして同時に、自己の内面を真剣に探究することの難しさを改めて感じたのだ。自分に最も近いと思われる自分の存在を探究することの難しさ。私の内側で明滅する現象、感情や感覚、そして思考の流れなど。それらは雲をつかむような捉えどころのないものとして、常に、今もこの瞬間に自分の内側で生起・消滅・変化・変容を繰り返しているのだ。

私は直近の3年間において、日々の仕事のデータを記録していた。具体的には、何の仕事に、何の探究分野にどれだけの時間を使っているのかを毎日データとして記録していたのだ。

先日、3年間の活動記録をひょんなことから振り返ってみたところ、面白いことに気づいた。約1,100日分のデータをエクセル上でグラフ化してみると、活動内容と活動時間が実に複雑な動きを見せていたのだ。その姿は、複雑性科学で言うところの、カオスの挙動であった。

これらのデータは、何の活動にどれだけの時間を投入したのかという、ある意味、客観領域に関する観察結果の集積体である。私自身驚いたのは、1万時間の法則を10年ではなく、3年間で駆け抜けたということ以上に、1万時間という膨大な投入量の実践活動の裏にある私自身の内面の心の機微を蔑ろにしていたというその怠惰さであった。

一人の人間として、一人の研究者として、一人の実践者として、自らの内側の動きを観察し続けたかったというその一点に己の無精さを見出し、懺悔したのである。おそらく、この3年間はそれなりの密度があったのだという慰めの気持ちと共に、それら3年間の空疎なものとして一蹴したいという気持ちもあるのだ。

自分の内面世界の一部始終を見届けることは、自分にしかできないという当たり前のことに気づいた時、内面世界の深化に寄り添い、深化の過程をひと時も逃してはならぬという思いに掴まれたのだ。そうした理由で、私は成人発達理論に関する学術的・実践的な内容を備忘録としてここに書き残すのみならず、自己の内側の動きを絶えず言葉で捉え、それを記録していきたいと思ったのだ。

これからの3年間も再び1万時間の投入量で己の探究・実践活動に励むつもりである。しかし、これまでの3年間とは全く次元の違う密度でそれを遂行しようと決心している。

239. 発達段階5/6「構成的認識段階」について

拙書『なぜ部下とうまくいかないのか』で取り上げた発達段階は5までであった。ロバート・キーガン自身も、書籍や論文などの公式な形では発達段階5までしか言及していない。ただし、キーガンに直接話を伺ったところ、やはり彼も段階5を超えた世界について十分に認識しているということがわかった。

この現代社会において、発達段階5に到達することすら困難であるため、段階5を超えた人物は数が非常に少なく、実証データの入手が困難である。そのため、発達段階5を超えた段階の特徴についてはどうしても推測的にならざるをえない部分がある。

しかしながら、発達段階5を超えたサンプルが少数ながらも存在するのは間違いない。実際に、キーガンの弟子であるスイス人の研究者スザンヌ・クックグロイターは、発達段階5を超えて、段階5/6、そして段階6の特徴について、実証データをもとにかなり詳しく説明している。

今年の3月に翻訳出版された『行動探求——個人・チーム・組織の変容をもたらすリーダーシップ』の著者ウィリアム・トバートは、スザンヌ・クックグロイターの説明モデルを参考にして高次の発達段階について同著の中で言及している。

トバートのモデルで言う「アルケミスト段階」がまさにクックグロイターで言う「構成的認識段階」に当たる（厳密には、クックグロイターは「構成的認識段階(アルケミスト段階)」と表記しており、トバートは彼女のモデルをそのまま採用していると言える）。

構成的認識段階に関する特徴は複数あるが、最重要なものとしては、言語で構成されたリアリティが内包する虚偽性を認識しながらも、言語は人間の社会生活の中で重要な役割を果たすということと深く理解し、実存的な問題と意味構築活動との間に潜む内的な葛藤と積極果敢に対峙する、という特徴が挙げられるだろう。

そして特に重要な点は、言語によるリアリティ構築の限界と自分の実存的な課題とが相互に関係し合っており、言語の限界性に気づいていながらも、そうした実存的な課題に対して言語を持って切り込んでいかざるをえないことを迫られているところにある。

即座に、これは非常に皮肉なことだと気づく。なぜなら、言語でリアリティを構築することが不可避に抱える限界に気づいていながらも、限界が常に付きまとった言語によって自身の実存的な課題を乗り越えようとするのを強制されているからだ。そのような特徴を持つのが構成的認識段階にいる人たちなのである。

さらに、この段階の人たちは自らの思考や認識が全て構成されたものであるという確固たる認識の下、「一即一切、一切即一」という非二元的なリアリティの真実と、自分の思考や認識が乖離したものであることに気づき始めるのだ。

これもまた非常に厄介な課題だと思うのだ。というのも、この世の全ての現象が一つの存在基底を持っており、一つの存在基底から全ての現象が発露すると認識し始めていながらも、その真実と己の思考や認識が構成された虚偽的なものであるという真実との狭間で揺れ動かされるからである。

すなわち、これらの二つの絶対的な真実を包摂して新たな認識世界を切り開いていくところに、この段階の発達的な苦しみがあるのだ。この段階に到達しているであろう過去の人物に目を向けると、彼らは共通して内側の実存的な課題に対して、限界を不可避に抱えた言語を用いて首の皮一枚つながった状態で何とか乗り越えていこうとする。

その姿には目も当てられぬ痛々しさがあるのと同時に、敬意を表するような勇猛果敢さもあるのだ。

240. ダイナミックシステム理論と多様な応用領域

抑えがたく高鳴る胸の鼓動を感じながら、深海の真っ暗闇に差し込む光を仰ぎ見ている心境である。こうした心境になっている自分を見るにつけ、渡欧の日が着実に迫ってきているのを実感する。

9月からのフローニンゲン大学では、複雑性科学と発達科学の双方をありとあらゆるエネルギーを注ぎ込んで、骨の髄まで学び取ること。まさにこれがフローニンゲン大学滞在中の私の主たる学術的な目的である。

当面の間は引き続き、個人の知性・能力の発達に関心を向けていこうが、その探究過程で得られた知見は個人を超えて、組織の発達にも活用できると思っている。私がこれから理解を深めていくのは、応用数学の一分野であるダイナミックシステム理論であり、これは複雑なシステムを探究対象とする。

人間の知性や能力というのは、まさに複雑なシステムであるため、ダイナミックシステム理論の知見は知性や能力の発達研究やその支援に対して多いに活用できるのだ。そして、グループや組織の発達プロセスは、個人の発達プロセスと同様に、あるいはそれ以上に複雑なシステムとして捉えることができるため、組織開発にもダイナミックシステム理論は大きな役割を果たすと考えている。

おそらく今後は、「ダイナミックシステム」という用語が頻繁に出てくると思われるが、各人の関心に合わせてこの用語の適用範囲を決定してもらいたいと思う。つまり、個人の知性や能力をダイナミックシステムとして捉えた説明を読みながら、組織に関心があれば、その説明内容を組織の発達に適用する道をご自身で探っていただきたいと思うのだ。

日本でも随分前から複雑性科学そのものは着目されており、一般書も数多く出版されている。そのため、複雑性科学に関する日本の土壌はすでに比較的整備されていると思うのだ。ここから一步進めて、各自の実践領域に複雑性科学の知見を取り入れる潮流が生まれてきてくれればと思う。

私の関心に従って購入した専門書のタイトルを眺めてみると、複雑性科学を活用した実践領域として、「複雑性科学と知性発達(発達心理学領域)」「複雑性科学と組織開発(経営学領域)」「複雑性科学と教育実践(教育学領域)」「複雑性科学と集合心理(社会心理学領域)」などがある。

これらの実践領域を中心に探究を深め、実践知に昇華させていくことが、9月からのフローニンゲン大学での学術生活における重要課題となる。私の心というダイナミックシステムは、現在の段階によって生み出された規則(秩序)に従いながらも、実に動的な動き(混沌)を毎日見せてくれている。

【追記】:「ダイナミックシステム」と「ダイナミカルシステム」の違い

ダイナミックシステム理論の学習当初、「ダイナミックシステム」という用語と「ダイナミカルシステム」という用語の違いについてそれほど気に留めていなかった。当時の自分にとって、両者は同じものを指すのだろうと思っていた。

というのも、両者を日本語に訳そうとすると、どちらも「動的システム」という訳語に収斂してしまい、両者の違いが伝わりにくかったからだ。簡潔に述べると、「ダイナミックシステム」とは、人間の知性や脳、天候や組織などの絶えず変化し続ける複雑なシステムのことを指す。

一方、「ダイナミカルシステム」はより専門的な意味を持ち、時間の経過に応じて変化するシステムの状態を記述する数学的な方程式のことを指す。発達心理学にダイナミックシステム理論を適用する場合、知性や能力を動的なシステムと見立て、その状態変化を記述する際に、微分方程式や差

分方程式が用いられる。そうした微分方程式や差分方程式がまさに「ダイナミカルシステム」なのである。

こうした差異を意識しながらも、このウェブサイトで掲載するブログ記事では数式表現をできるだけ避けたいと思うので、基本的には「ダイナミックシステム」という用語を多く用いることになると思う。